

俳句と川柳 ～その重なりあうところ～ ①

金澤 健

はじめに

私は、滑稽俳句協会会員として、日夜「おかしみのある俳句」を作ること
に意を砕いております。作句に行き詰まったような時には、同じ俳句の仲
間である、伝統俳句や新傾向俳句を一読者として読んだりしますが、一番
インスピレーション（作句のひらめき）を貰えるのが、俳句の兄弟分とも
いうべき川柳なのです。私は常々、「俳句と川柳とは確かに異なる文芸で
はあるが、そのルーツは同じ（俳句は俳諧の発句を起源とし、川柳は俳諧
の前句付けを起源とする）なのであるから、俳句は、殊に自分が係ってい
る滑稽俳句は、川柳と重なり合う部分があるのではないか」という強い思
いを抱いております。

そこで、俳句と川柳の共通するところ（いわば、先祖を同じくする子孫
の、共有するDNAとでもいうべきもの）を探り、今後の自分の作句の糧
としたいと思い、考察を進めたいと思います。

共有する部分

1. 五七五の十七音

これは言わずもがなでしょう。俳句も川柳も、「日本が世界に誇るべき
十七音の短詩型文芸」なのです。

2. おかしみ

両者のルーツである「俳諧」は、俳も諧も共に「おかしみ、滑稽」を意味するということは、広く知られた事実です。従って、俳句も川柳も基本的には、読む人に「おかしみを感じさせたり、滑稽味を堪能させたりする句」であるべきなのです。

3. 句末切れ

一説では「切れがあるのが俳句、切れがないのが川柳」とも言われますが、果たしてそうでしょうか。川柳の名句と言われる

寝ていても団扇のうごく親心

碁敵は憎さにもくしなつかしし

両句とも、句末は体言止めで「句末切れ」を立派に行い、読む人に読後の余韻（おかしさ、人情の味など）を味わわせてくれています。一方、俳句の方も「一物仕立ての場合は、句中に切れを入れず、句末で切る」ことは一般的手法です。例えば、

桔梗の花の中より蜘蛛の糸 （高野素十）

即ち、両者とも「自分の詠みたいことを、句中に切れを入れず、一気に詠み、句末で切る」ことで、「切れの共有」を立派に行なえるのです。

4. 季語

俳句は「原則として季語を詠み込む」。一方、川柳は「季語は入れても、入れなくても自由」というのが決まりです。私は、日本人なら誰でも知っているような季語（例えば、満月、夕立、海水浴など）を詠み込み、ことさら季語を意識せず作句すれば、俳句としても、川柳としても成り立つ（勿論、その他の条件を満たしたうえでの話ですが）と考えます。

5. 平明さ

繰り返しになりますが、両者のルーツは俳諧であり、その俳諧の発生時からの二大要素は庶民性（大衆性）と滑稽性だったのです。「誰にでも、気安く詠んで貰え、その詠まんとするところを容易に分かって貰え、感動（主として、おかしみ）を共有して貰う」ことこそ、俳諧を始めた先人たちの思いであった筈です。持って回った言い方は避け（一気に読む）、難しい言葉は用いず（一般的季語しか使わない）、おかしみという人類最大の滋味の一つを、読む人にも一緒に味わってもらおうのです。

（次号につづく）